連載エッセイ・第32回

低い視線

鈴木一誌

前回のエッセイ「よっこらしょの効用」で歩行について記した数日後、とつぜん右下半身を激痛が襲い、歩けなくなった。レントゲンを見ながら整形外科医は、「腰椎変形による座骨神経痛ですが、病気ではないので直せません」と言う。そもそも近所にもかかわらず病院まで歩くのが困難で、妻が車椅子を借りてきて、ようやく辿りついたさきで、「直せません」とあっさりと告げられたのだ。ほぼ机に向かいつづける職業＝ブックデザインにたずさわっておよそ四〇年間、ツケが回ってきた。医者はこうも言った。「なるべく痛くない姿勢でいるように」。だが、痛くない姿勢などどこにもなく、身の置き所がないようなのだ。寝ていても痛みが走り、椅子に座って寝るありさまだ。

「なんとかしなくちゃ」と、知人の紹介で鍼灸に通うようにした。乃木坂にある鍼灸医院まではもちろんタクシーなのだが、自宅からタクシーが行き交う大通りまでの百メートルを、いくどかうずくまりながらようやく歩ききる。常日ごろ、早足で歩いていた人間が、杖をついてヨタヨタと歩いているので、ずいぶんと近所のひとから驚かれた。

タクシー運転手の腕の差が身に染みる。腕利きは、目的地にピタッと横付けしてくれるが、道を知らない運転手は、遠回りしたあげく、道の反対側で客を降ろす。タクシー・ドライバーとはずいぶんと話を交わした。「リストラで失業し、北海道から上京してきた」と語る、似たような来歴をもつ運転手ふたりに、つづけて乗りあわせたときもある。座る職業のために腰痛を患う運転手も多く、情報交換もした。こういうシーンもあった。「病気ではないので病院では直せません、と言われた」と嘆くと、運転手は、「わたしなんか、去年の秋に余命二年と宣告されました」と、さらりと言う。二の句が継げなかった。

発症後約一か月、短距離ならノロノロと歩けるようになったころ、ある決断を迫られていた。写真家の森山大道さんのロンドンでの展覧会オープニングと、フランクフルト書籍見本市に行くつもりで、かなり以前から予約を済ませていたのだ。鍼灸医は、「なるべく行くように」と勧める。多くの患者を診てきた経験から、「行かなかったあとの挫折感が意外とあとを引く」。「杖も持っていくように」とも。周囲の扱いが変わるから、と。

十月上旬の遅い夕刻、周囲からは「無謀、暴挙」と言われながらも、ロンドンのホテルに投宿した。すでに暗くなりはじめ、夕食の時刻だ。ミシュランのガイドブックは、至近距離にインド料理店があると告げている。出かけたのだが、店が見つからない。痛い足を引きずりながら途方に暮れる。当たり前のように歩けたときとは距離感が大幅にちがうのだ。さらに、右足の自由が利かないために、方向感覚までが齟齬をきたしたようだった。かろうじて行きついたテーブルで飲んだ発泡ワインが、咽を滑り落ちた。

全精力をフランクフルトで消尽したらしく、身動きが取れなくなり、帰りの空港では車椅子の世話になった。車椅子のわたしを見て、航空会社の職員が日本へと連絡をしてくれる。成田空港に降りたつと、全日空の職員が車椅子で待っており、あずけた荷物の受取りから、入国審査、通関と、車椅子を押されたまま、猛スピードで通過できた。車椅子の視線から空港を見る、得がたい体験をした。

ずいぶんと歩けるようになったいまも、ときおり、杖を支えにして屈みこみ、足を休める。しゃがむと地面が間近に見える。アスファルトの路面にも多様な表情があり、さまざまなモノが落ちている。望んだわけではないが経験せざるを得なかった〈低い視線〉を、これからのデザインにいかせればと思う。

（すずき・ひとし／グラフィック・デザイナー、題字デザインも筆者）